

2018年1月28日(日) 近畿旧友会ハイキングクラブ「燦歩会」例会 (第466回)

「古市古墳群から道明寺初詣 (大阪)」

2018年初の燦歩会は、恒例の初詣です。世界遺産への登録を目指している古市古墳群を歩き、道明寺と天満宮にお参りします。

参加者は36名(内女性13名)ですが、3名は途中から加わる予定で、近鉄南大阪線「土師ノ里」駅をスタートしました。(地図上部の黄丸印)

「はじのさと」も、まことに難読地名ですね。歴史のある地名で、後でまた出てきます。

強い寒波に襲われていた日本列島。藤井寺市の観測点でも、朝10時の気温は2.5度でした。予報は「曇りのち時々雨か雪」。結局最高気温も6度にしかありませんでしたが、幸い風はありませんでした。

地図の丸印の古墳を巡ります。まずは、駅から道路を渡って、目の前の鍋塚古墳へ。



大古墳群の中ではささやかに見えますが、高さ7m、底辺の一边50mの大型の方墳です。すぐ隣の仲姫命(なかつひめのみこと)陵古墳の堤に食い込んでいる事などから、5世紀初めに築造された、王族に近い人の陪冢(ばいちょう、ばいづか・陪塚=付き従う小型の墳墓)と考えられているそうです。

鍋塚古墳を降りて、仲姫命陵古墳の傍らを東へ。あまりの大きさに、残念ながら私のカメラでは、どう撮っても部分ばかり。全容は空撮に頼るしかありません。(写真 同マップより)



古市古墳群の中で、南の応神天皇陵古墳に次ぐ大きさ、全国でも9番目に大きい古墳です。仲姫は応神天皇の皇后に当たります。墳丘の長さは290m。住宅街との間の道を半周して、写真右下の角に出るまでに、10分以上かかりました。この時代の王族の勢力の大きさが偲ばれます。

古墳のぎっしり並ぶこの辺り。
一つを過ぎると、次の古墳の始まりです。
古室山（こむろやま）古墳には、こうして登ることが出来ます。
墳丘の頂上で集合写真ですが、今回私は棄権です。
登りがきつく、セルフタイマーの10秒間に、辿りつく事が出来なかったのです。残念！！



古室山古墳から降りて、応神天皇陵古墳を目指します。
途中、西名阪自動車道をくぐる所で気になるものを見ました。
工事の残土かとも思えそうなマウンドですが、もしや、これも古墳でしょうか？
何しろ古墳の巣のような所ですから。 取りあえず歩きながら写真だけは撮りました。



後でマップをよくみると、青丸印の所、
自動車道の真ん中に古墳の印がありました。
赤面山（せきめんやま）古墳です。
一辺が15メートルほどの方墳ですが、
詳しい事は分かっていません。
“開発と文化財保存”の一つの象徴とも
いえる赤面山古墳の姿ですね。

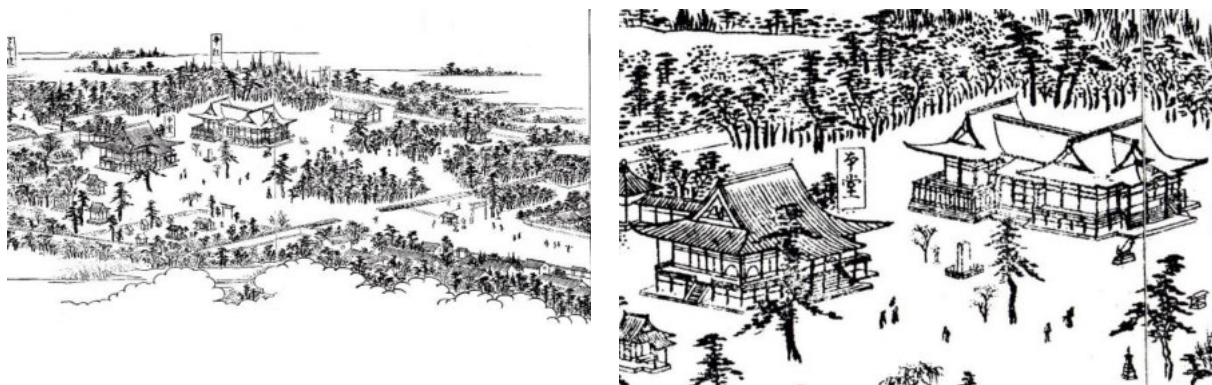
応神天皇陵古墳の北端、前方部にある拝所に着きました。
ここもまた、その一部しか目に入れる事が出来ません。
この先に長さ425mの墳丘が伸びているのです。
古市古墳群最大、全国でも仁徳天皇陵古墳に次ぐ大きさ、
5世紀前半に築かれて、築造に要した土砂の量では
最大と云われています。



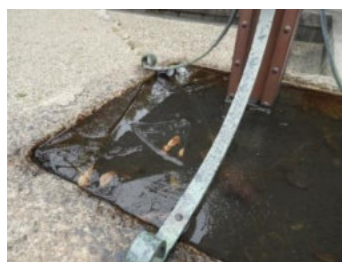
古墳群を離れて、第2の目的地、道明寺に向かいます。
6世紀の末頃、この地の豪族土師（はじ）氏の氏寺として創建されたお寺です。
その頃は「土師寺」と呼ばれていました。
土師氏は、土師器・埴輪の製作、大王の喪葬を職務としていました。
先祖の野見宿祢が、時の皇后の死に際して、殉死にかえて埴輪を祀ることを提案し、
その功で「土師」の姓を与えられたと伝えられています。

土師氏は奈良時代末頃に、菅原氏、大枝氏などに分かれ、平安時代に菅原道真が出た事から、
この寺の名も高まります。
右大臣として手腕をふるっていた菅原道真は、901（延喜元）年、藤原氏の策謀により、
九州大宰府に左遷されます。
その途上、この土師寺にいた叔母の覚寿尼を尋ね、別れを惜しんだというのです。

その後、道明寺（どうみょうじ）と名が変わり、明治の神仏分離で、道明寺と道明寺天満宮に分かれて、今日に至っています。1801（享和元）年の河内名所図会、道明寺の場面です。左側にあるのがお寺の本堂、右側が天満宮の本社です。



今、道真ゆかりと伝えられる十一面観音像はお寺に祀られ、遺品の鏡・硯・革帯などは天満宮に保管され、いずれも国宝に指定されています。



折からの寒さ、道明寺の雨樋の受鉢には氷が張っていましたが、天満宮の梅園では梅がほころび始めていました。さすがに梅と縁の深い天神さんです。

お寺と天満宮の両方に初詣して1年の燦歩の安全を祈り、門前のお店で昼食会、14時に解散しました。

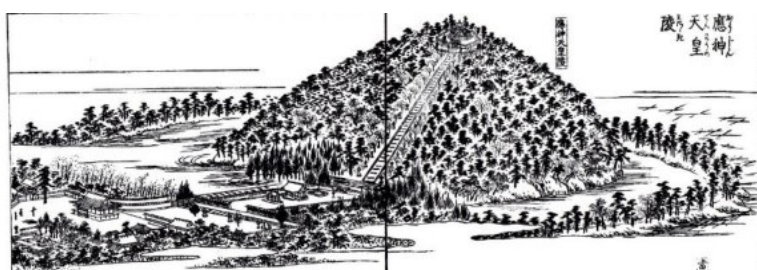
* * * * *

相変わらずの補足と蛇足で失礼します。

補足の1 応神陵と誉田八幡宮

解散後に、応神陵の南に接する誉田（こんだ）八幡宮にお参りしました。（マップ下端）
 応神天皇の名前「誉田別（ほんだわけ）」に因んで、応神陵古墳は誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳とも呼ばれ、この社は陵を守って、誉田八幡宮と呼ばれて来ました。

河内名所図会に描かれた応神陵の後円部。注目すべきは、頂上の神殿と参道の石段です。
 江戸時代、祭りの日には、神輿が山頂までお参りしたそうです。



江戸時代の末に、天皇陵古墳など120余基の大修復事業「文久の修陵」が行われました。尊王思想の高まった時代です。この応神天皇陵も3,050両の巨費で整備されました。

(1両=10万円として概算3億円でしょうか。因みに全体の事業費は8万両だったとか) 山上の神殿、参道などは、この時に廃されたようです。事業の報告書「文久山陵図」は、修陵の「Before=荒蕪」と「After=成功」を描いていますが、「Before」には描かれていた神殿が、「After」では姿を消しているのです。

今、八幡宮には、応神陵の陪冢丸山古墳から発掘された「金銅製鞍金具」などが伝えられ、国宝に指定されていますが、土曜日公開という事で、この日は見る事は出来ませんでした。また、昔御陵の上まで登っていた御神輿は、今は手前で引き返しているという事でした。

補足の2 土師寺の遺構

土師寺・道明寺の盛んな様を偲ばせる遺跡が、門前に残っていました。

一際大きいのが、塔の心柱の台石でしょう。塔は五重塔だったことが、11世紀ごろ寺を訪れた漢詩人惟宗孝言(これむねたかこと)の詩に

「雁塔五重…」とある事で知られます。

また絶大な権勢を誇っていた藤原道長が、1023(治安3)年10月27日、この寺を訪れています。高野山に詣でた後、法隆寺を経て、立ち寄ったのです。一行は翌日四天王寺で仏舎利を見えています。

道明寺が、当時、法隆寺や四天王寺などの大寺と同列に考えられていたという事でしょう。

伽藍は戦国時代の兵火で焼失しますが、織田信長の援助で再建され、徳川幕府も保護を続けたようです。



蛇足 「道明寺」

「道明寺」と云えばお寺の事よりも、「桜餅」を思い浮かべる方が多いかも知れません。お寺で作られていた保存食のもち米の糰(ほしい)が「道明寺粉」と呼ばれ、いつしか桜餅の代名詞になったとか。早く満開の桜を眺めながら、「道明寺」を頬張りたいものです。

* * * * *

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。

(事前に予約が必要な場合もあります)

今後の予定 2月 どんづる峰を訪ねる(大阪・奈良)

3月 御坊と道成寺(青春18切符を利用 和歌山)

4月以降の予定は、2月半ばに決定します。

参加ご希望の方は、山村恵一さんにご連絡下さい。(電話 0743-20-4159)

ご一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

生島(おじま)幸弥 記